

今月の

数字

0.4%台

(日本及び中国における人口に占める
正月の海外旅行者比率)

松田 恭子

Profile まつだ・きょうこ ●津田塾大学国際関係学科卒業後、日本能率協会総合研究所で10年間公共系の地域計画コンサルタントとして勤務。その後、東京農業大学国際食糧情報学科助手を経て、現在、農業マーケティングアドバイザーとして農産物商品開発や販路開拓などをサポートする。(株式会社アソシエイト代表取締役)

日本政府観光局によれば、2015年の訪日外国人客数は1,974万人に達し、前年(1,341万人)に比べ47%増の過去最高を記録した。とくに、中国は499万人と、前年241万人の2倍以上、一昨年131万人の3.8倍に急増した。16年に旧正月前後の休暇である春節を海外で過ごすと考えている中国人は600万人に上るといわれている。この数字を多いと見るか少ないと見るか。

日本人の場合、15～16年にかけての年末年始で1泊以上の旅行者数は国内が過去最高の2,996万人、海外旅行人数は62万人と推測されており、海外に出かけるのは人口の約0.47%だ。中国人の場合も春節を海外で過ごすと考えられる600万人は人口13.6億人の約0.44%。割合としては日本と同程度だ。本来、中国人も旧正月は家族と過ごす人が大半であり、大掃除をして家を飾り、大晦日は中国版の紅白歌合戦を観て、お年玉やメッセージを交換し、お寺やイベントに出かける。

日本と大きく事情が異なるのが「出稼ぎ労働者」の存在だ。中国の国家統計局によれば、14年時点で中国の人口は13.6億人。そのうち7.5億人は都市人口、6.2億人は農村人口であり、その比率は55:45と10年に都市人口が公式に初めて農村人口を上回って以来、その数は年々増加している。しかし実際には、中国総人口のうち農村戸籍保有者は約8.7億人であり、差分の2.5億人超は農村に戸籍を残したまま都市部に移り住んでいる農民工及びその家族の総人数と考えられる。

かつて農村部から都市部に出稼ぎに来た農民工は低賃金で働き、「世界の工場」を支えてきた。旧正月になれば鈍行列車の「硬座」と呼ばれる二等車の座席か立ち乗りの「無座」に大挙して乗車し、十数時間かけて内陸部に帰郷した。1991年の旧正月に桂林から貴陽まで20時

間の鈍行列車に無座で乗車した際、その混雑ぶりは、昔日本で朝の通勤ラッシュ時に山手線で見られた乗車密度の乗客が無理やりその場に座り込んでいる状況に近く、帰郷する大学生も出稼ぎ労働者も売り子も命がけの長距離乗車だった。遠く離れた農村に残してきた子どもや親に送金し、旧正月は帰郷して家族との絆を深めることが当時の農村工にとっては人生の重要な価値だった。

しかし、現在農民工の半数近くを占める80年以降生まれの「新世代農民工」の価値観は大きく変わってきているようだ。自分がいつか戸籍のある農村に戻るという意識は薄く、都市の文化に愛着があり、毎月の給料は自分のために使う場合も多い。家族に顔を見せることは大事だが、何も混雑する旧正月に旅費やら土産代やらに1カ月分の収入を費やしてわざわざ帰る必要はない、という気持ちの表れだろうか、今年の春節前後40日間に国内移動する旅客の延べ人数は、29.1億人とどまり、2013年の34億人をピークに減少を続けている。

農村に富を還元してきた前世代農民工とは異なる、都市で消費を押し上げる新世代農民工に都市の戸籍を与え、都市部で不動産を購入できるように調整を行なうことで都市の空き家問題が解決し、新たな消費の担い手となることが期待されている。農民工の平均月給は近年上昇したとはいえ、15年時点で3,072元。全国32主要都市の平均月給6,700元や新卒の4,793元に比べるとまだまだ低い。しかし、日本への個人観光ビザ取得条件の年収10万元以上は別として、団体旅行は3,000元～1万円のツアー商品が多く、月収3,000元以上は標的市場に入ってくる。今後、中国経済の浮沈も日本の観光需要増も新世代の農民工が中間所得層として育つかどうかにかかっているといっても過言ではない。